# 科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 26 年 6月18日現在

機関番号: 13904 研究種目: 挑戦的萌芽研究 研究期間: 2011~2013 課題番号: 23656372

研究課題名(和文)まちづくりにおける隣接地域間の相補的ネットワーク形成に関する実践的研究

研究課題名(英文)A Practical Study on the complementary network formation between the neighboring are as

#### 研究代表者

今田 太一郎 (Imada, Taichiro)

豊橋技術科学大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号:40300579

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文): 本研究は隣接する地域が相補的関係を構築することが今後の地域づくりにとって重要であるという観点に立ち、岐阜県郡上市を研究のフィールドとして、山間部に産する間伐材の活用と中心市街地のまちづくりを結びが思ることを試みた。

具体的成果としては、林業関係者および、木材関係の職人、デザイナー、などを巻き込んだ多面的で柔軟なモノづくりのネットワークの構築。地域の文化的背景を織り込み、まちづくりプログラムと連動したプロダクトのデザインおよび展開手法の開発が挙げられる。今後、更に実践的検討を行う必要があるが、単なる製品開発に留まらない隣接地域で共有される生活文化に根ざしたモノづくりの可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文): This research tried to tie up the practical use of thinner timber which are produc ed to a mountain slope and the city planning of a central city area as the field of research of Gifu Gujo City, from a viewpoint that it is important for a future community improvement that an adjoining area buil ds complementary relations.

As a concrete result, the multifaceted and flexible network consists of the forestry persons concerned, the wood-related artisans and designers has been constructed. The cultural background of the area is woven in and the design of a product and the development of the deployment technique which were interlocked with the city planning program are mentioned.

From now on, although practical examination needed to be performed further, the possibility of the craftsm anship rooted in the life culture shared between the neighboring area which does not stop at mere product development was suggested.

研究分野:工学

科研費の分科・細目: 建築学・都市計画・建築計画

キーワード: まちづくり 相補的関係 ネットワーク型組織 郡上市 間伐材 プロダクト 隣接地域 ナラティブ

### 1.研究開始当初の背景

現在、地方都市は、産業の空洞化、大規模商業施設の進出等による経済地盤の低下、人口の減少、高齢化等、様々な問題が山積し、苦しんでいる。

そうした諸問題を乗り越え、衰退しつつある地域社会が再生するためには、地域を熟知した市民が主体的に地域環境に携わり、課題に柔軟な対応し、生き生きとした生活環境、経済を作り出していくことが重要であり、現在、各地で市民協働型のまちづくりの活動が展開されている。

しかし、現状の市民協働型のまちづくりは、 文化的、地理的に括られた一定の生活エリア、 あるいは商業エリアの中で完結している場合が多い。特に地域資源(物的、文化的、人 的資源)が限られる地方都市においては市民 協働型まちづくりの空間的限界性は、まちづくりそのものの限界性につながる可能性が ある。

# 2. 研究の目的

そうしたまちづくりの空間的限界性に対し、異なる地域資源を有するエリアそれぞれの物的、文化的、人的資源といった特長を相補的に結びつける事で単一のエリアだけでは実現不可能な新たな取り組みを行う事が可能になるという点から、隣接するエリアがまちづくりネットワークを形成することは有効だと考えられる。

本研究では岐阜県郡上市を主たる対象として、林業地域に産する間伐材の活用と八幡町中心市街地におけるまちづくりを結びつける実践を通して「山 まちの相補的な地域づくりネットワーク」の可能性およびネットワーク(図1)を構築する為の諸条件を明らかにすることを試みる。



図1 間伐材活用による隣接地域間の関係形成イメージ

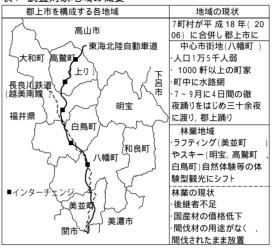
# 3. 研究方法

# (1) 研究対象の概要

本研究が実践のフィールドとした郡上市は岐阜県の山間部に位置しており、7町村の

合併により平成18年に誕生した。(表1) 市を構成する7地域のうち、最大の人口を有する八幡町は、街の中央を流れる清流吉田川、街中に巡らされた水路網、夏には夜を徹して賑わう郡上踊り等、自然、文化に恵まれており、多くの観光客が訪れる。一方かつては林業が盛んであった八幡町を除く6つの地域は、自然体験型の観光産業が徐々に増加しつつあるが、今でも多くの山林を有し、林業関係の企業も多い。

表1 調査対象地域の概要



#### (2) 研究の進め方

岐阜県郡上市を対象として、平成 23-25 年度の3年間にわたって、各年度に対応した以下の3つのフェーズを設定した。

フェーズ1:郡上市の中心市街地である八幡 町旧市街地のまちづくり、および、隣接する 地域である山間部の林業の実態把握を行っ た。

フェーズ2:山間部地域に産出される間伐材を用いた家具や空間装置のデザイン・製作を行う。更に郡上市中心市街地(八幡町)におけるまちづくりの取り組みを間伐材製品・作品のショーケースと位置づけ、プロダクトの活用、展開を図った。

フェーズ3:フェーズ2の実践を踏まえて、実際のモノづくりを通して、森-まちを結ぶ プロダクトデザイン・製作の仕組みづくりお よび、中心市街地でのプロダクト展開の手法 の検討を行った。

### (3) 各フェーズの内容

フェーズ1:郡上市における森と中心市街 地まちづくりの現状把握。

### ・郡上市における森の現状

研究を進めるにあたり、平成22-23年度に渡って、林業・木材業関係者、および八幡町におけるまちづくりの担い手に聞き取り調査を行った。

郡上市の林業は全国的な状況と同様に、低価格の外材の普及により衰退を余儀なくされている。また、かつては建築の足場等に使われた間伐材も運び出し、製材のコストに見合う使用用途がほとんどないため、間伐後放置された状態になっている。そうした状況に

対し、林業関係の企業は間伐材を利用した割り箸プロジェクトや間伐材パネルの生産に取り組んでいる企業も見られるが、成果には 結びついていない。

林業関係者については、間伐材活用に対する意識は高いものの、林業そのものが逼迫した状況にある為に、明らかな流通の見通しを望んでいることが分かった。まちづくりの担い手については、個々に意識の差はあるものの、間伐材を活用したプロダクト製作について強い関心を抱く人々も見られた。

・八幡町における市民主体のまちづくり

八幡町では、70年代後半に「水の町」 として、その生活環境に対する再評価が高ま って以降、市民がまちづくりに対して積極的 に関わっていく環境が育まれてきた。1998 年には中心市街地を対象にしたまちづくり 協議会が結成され、官民一体となってまちづ くりに取り組む体制が作られた。(表2)そ の後、2008年の日吉町嵐会の活動(歌舞伎 演)をきっかけに、まちづくり協議会の活動 と平行して、個人や少人数のグループによる 活動が展開し始めている。そうした活動はク ラフト展のように、複数人の協働や新町発展 会のように従来の組織との協働に発展する ケースも見られる。活動の内容としては、音 楽や映画、演劇等の芸術をテーマにした活動 (嵐会、五叉路シアター、月影企画、立光学 舎)や食文化や自然環境・生活環境の保全や 演出等、多岐に渡っているが、主として八幡 町における生活文化の充実を意図したもの が多い。まちづくり活動の場に関しては、産 業振興公社が管理する町家「伊之助」「玄麟」 喫茶店 2 階、寺院の境内、商店街の通り、空 き地、公園等屋内外まで幅広く使われている

表2 郡上市八幡町における主なまちづくり活動主体 (2008 以降の活動)

組織·活動名	設立	組織	主なまちづくり活動・役割	主な活動場所
郡上市基盤整備課都市計画係	-	行政	・まちづくり協議会と協働でまちづくりを進めてきた	-
財)郡上八幡産業振興公社	1999	公益法人	・郡上市の観光活性化。町家をまちづくり活動の場として提供	スペースを提供
郡上八幡まちづくり協議会	1998	一般公募の有志	·4つの部会·地域事業に住民が関わる仕組み	中央公園
			・郡上市中央公 圏 opening はるいろフェス、愛宕公園整備計画等	市庁舎等
風花 / WingHouse	2002	社会福祉協議会	・障がい者福祉事業所。 地域に開かれた福祉環境。 町家活用	町家風花
新町発展会	-	地域の商店主	・2012 よりクラフト展等と連携して八の市を開く等の取り組み	新町通り
日吉町嵐会	2008	地域有志	・町家伊之助活用歌舞伎の上演等。・かつて、映画館や劇場があ	町家伊之助
			った日吉町界隈の賑わいの復活。常設の劇場建設が目標	町内空き地
郡上八幅クラフト展	2009		・岐阜市のカフェ店主が主宰する手作り市として始まる。1月を	
実行委員会		地域内外の有志	除く奇数月に一度、八幅周辺、岐阜市、名古屋市等から出店者	寺院境内
			<ul><li>イベントの改称に合わせ地元の若手が運営の中心に</li></ul>	新町通り
地球数11隊	2007		<ul><li>次世代の子ども達によりよい環境を引き継ぎたいと主婦を中心</li></ul>	
	-2012	地域内外の有志	にして始まった活動、平和や環境の保護、再生をテーマに映画の	寺院本堂
			上映や農業、間伐材の再活用に関わるプロジェクト等	他
咲守の会	2005	地域有志	桜を育て受け継いでいく活動や清掃ポランティア、花見等を通し	777 ede (1) 780
			て、愛宕公園を守り、育てる活動をしている	受宕公園
クラブレイラ	2003	ライブハウス主宰	・音楽を通して、様々なイベントに出演	ライブハウス
レイラアカデミー )		の音楽サークル		各イベント会場
ごはん企画	2011	地域有志2名	・食をテーマにした活動を行う。 郡上八幅ぐるぐる食べ歩きツア	旅館
			<ul><li>一や老舗旅館を舞台に吉田川デバートメントストア等を実施</li></ul>	町歩き
五叉路シアター	2009	地域有志2名	<ul><li>・郡上八幅を中心に活動するカルト映画グループ。常設の箱がな</li></ul>	寺院本堂 町家伊之助
			いノンシアター系の映画館。町家や公園、お寺の本堂等で活動	中央公園 等
グジョウフルライフ	2010	地域有志2名	<ul><li>新町発展会と連携して都上おどり皆勤賞を企画</li></ul>	-
月影企画	2010	地域有志1名	<ul><li>伝承芸能から、現代文化まで様々な文化を町の中につなげるこ</li></ul>	町家伊之助 町家さいとう
			とを目的に音楽ライブを個人で多数企画	関家されてつ eBANATAW等
糸カフェ	2010	地域有志1名	・ケータリングカフェ、情報や人がつながる場を目指し、様々な	クラフト展会場
			活動とコラボ・週末(12・7-13・1) や踊り時にカフェを営業	町家 玄鱗 等
eBANATAw	2011	喫茶店	・2 階をイベントスペースとして提供。音楽ライブ、上映会等	スペースを提供
			・老舗 の4 人が集まり、に着目、様々な組織と連携、明かりで街	受容公園、
Join Hands	2009	地域有志4名	の自然、文化、歴史等、郡上八幡らしさを照らし出す活動	城山公園、
			・はる色のぼんぽり(愛容公園のライトアップ)等	小駄良川等
立光学舎	1987	地域有志	・地方の伝統的音楽の収集、学びの場、ライブの企画等 。	eBANATAw 等
まちやど	2012	地域有志2名	<ul><li>・自宅の町家で服の物々交換イベントエクスチェンジ開催等。</li></ul>	まちやど、町家玄
水の学校	2013	NPO 法人化準備	・研究者、地域有志、行政。水がテーマの学びの場	町家「玄鱗」
ing	1989	株式会社	・地域に積極的に関わ る CATV 局。店舗をショールーム兼コミュ	「ギャラリー
	ı		ニティスペースとして活用、まちづ(り活動 の CM や番組	かみてつ

3)フェーズ1の結果:間伐材活用と市街地まちづくりの連携の可能性

郡上市の林業を取り巻く環境は厳しく、なかなか活路を見出せずにいる実態がある。一方、八幡町におけるまちづくりに関しては、市民個々の問題意識や関心を背景に多様な

- (2) フェーズ2:まちづくりの状況に応じた地産木材プロダクトの開発と展開
- ・市街地におけるまちづくりプロジェクトと の連携

平成24年度に実施したフェーズ2では、フェーズ1で把握した森の実態を踏まえ、林業者、デザイナー、製作者、利用者を束ねた組織を最初に作るのではなく、まちづくりの具体的なプロジェクトに対応したプロダクトを作成、使用しながらプロダクトの精度を高めつつ、具体的なプロダクトを見せることで、各主体の意識を高め、関係化を図ることとした。

具体的には、間伐材を活用する対象として 表 3 に示す 3 つのまちづくりプログラムを 取り上げた。郡上八幡クラフト展は八幡町内 外から多く出展し、また、手作りのクラフト 雑貨や工芸品が並ぶマーケットで、間伐材を 利用したプロダクトのショーケースとして ふさわしいと考えた。また、愛宕公園整備計 画は市民協働による既存の公園の整備であ り、公園整備計画策定の過程でも、間伐材活 用に関する市民の声も上がっており、その活 用実験の場で地元産木材を活用することと した。水の学校は町家を拠点として八幡町の 水をテーマにした市民と研究者の交流の場 として、活動が始まろうとしている。町家の 内装に廃校となった小学校の床材を用いて おり、小学校の階段材と間伐材を組み合わせ て水の学校で利用するテーブルを作成する ことを提案がスタッフからあった。これら3 つのプログラムは公共性・私用性の違い、屋 内・屋外の設置環境の違い等の点において異 なる性格を持っている。

表3 連携まちづくりプログラムの概要

-200	たがら ファイブア	1774071%3	
プログラム	都上八幅クラフト展	雙宿公園整備計画	郡上八幅水の学校
阿伊紹維	都上八幡クラフト展実行委員会	中心市街地まちづくり協議会	中心市街地走ちづくり協議会
時期·期間	1月をのぞ(奇数月に開催	2011年度基本計画 201 2年度実施計画	2013 年度3月設立
内容	2009年9月に醸造守クラフト展として始まる 都上市を中心にモノゴくりをしている若字作 家が字作りの温を販売する。アクセサリー 文具などの小物から飲食物まで多いとき で 20 数店が出展	歴史、自然、文化を活かした公園計画、市民が 日常的に無列ビングパークがテーマ、ハード の整備と同時にソフト間についても検討、隣接 私事事で等 年 11 月に行われる「ふるかと問う」 と連動し て 2011、2012 年に活用実験を実施	都上八幅をフィールFとした研究の無様。市民 への公開、研究者和立、研究者と市民の交流の 増づくりを目指した活動
間伐材活用 の可能性	出店者 は 2m 四方のブース。多くの場合、既製 品のテント、椅子を持ち込んで利用、同伐材を は回しホテントは場の倒性が付けが以来る可能性	地形、自然が変化に富んだ環境であり、環境 に呼応したベンチや避異的プロダクトなど 地震大林は国の環化しての可能性を疑める	小学校の廃材(地産材)を活用した内装の整備 を行った。小学校の階段の廃材と開伐材を組み ないせかの系数的

上記の3つのまちづくりプログラムにおいて、5種類のプロダクトの製作を行ったが、 プロダクト製作のフローと製作に関わった 主体は、ベンチとハンモック立て以外は全て

異なっていた(表4・表5)。関係主体の違 いは、まちづくりプログラム毎に異なる人々 が各自の関心によって間伐材活用に関わっ たこと、そうした人々が持つ人的つながりを 活用して、プロダクト製作を行ったことに起 因している。例えば、郡上八幡クラフト展に おける木造テントは、研究者チームがデザイ ンを行い、製作者を通じて製材業者から間伐 材の供給を受けたが、愛宕公園の活用実験で は、そりの製作に興味を示した市民が、知り 合いに作成を依頼し、ハンモック立て、ベン チ製作については協力を申し出た市民が、直 接製材業者に廃棄予定の木材(間伐材ではな い)の供給を交渉し、研究者チームとともに 製作を行った。また、水の学校では、その発 起人である郡上市職員が自らデザインを行 い、間伐材供給・製材・施工を一括してでき る工務店に製作を依頼した。

表 4 各プロジェクトにおいて製作に関わった主体

活用プログラム	種類	製材·供給	デザイン	製作者	活用者
郡上八幡クラフト展	木造テント	U 製材	岐阜高専	M 建築(工務店 )	H(出展者 )
愛宕公園整備計画 (活用実験 )	ベンチ ベンチ - ハンモック スタンド	S製材 — — — — S製材	岐阜高専	岐阜高専 岐阜高専 W(郡上市 )	ふるさと祭 来訪者
	そり	不明	S(芸術家 )	S(芸術家 )	
郡上八幡水の学校	学校廃材と間伐材 による机	K番匠(工務店 )	M(郡上市 )	K 番匠	水の学校

表 5 フェーズ2で製作したプロダクトの概要

4450	部上八幡クラフト祭	Charles a secondario	きの手段		
20801	木造便立サント	ハンモックスタンド	K97	- 69	6.
			FAFTME		
机焊接端		7 a		Control of the Contro	
	·様々化おも使っておむ。で生活化。	· 包括: 果花: CT. (食用物)	SECTION	3750777777	
변칙	ERIH COLLEGE WARRENCE	集以 お記録機会中でグラックスして	機能 食事を体験など様々は構動	(14)	型性目と単位が毎日
AT	は「音楽 ・そべつトの選性性内になる (2.877) ・これで「かがりいの様だな、「ため 観覚の可能性	ましめを現在実ま ・投資の事業で いたもったとおおけたタータン まっておどもよべないのイベンルで 異常できる可能性	で使属である ・電荷への対応性 ・可能成介に下で、手列してただ 性種名で基質性が考えられる	20日本の東京	学校の運動等を受技技と確 の高わかからことでサンスイを 技術 いてロタかト級等ではなく開発 のでいるだめたのでと確ふた 個別できる可能性
-	が必要なため、予整で、発量で 等を検討する必要 ・単数を終り程序のスタッフによ を設置等タリフト語でのまえを まする	- 博皇高四級計 - 接甲精聯刘隆之人也及	- プログラ・ロ経費も - 最全場所の発達 - 分級日本の機能力をお扱う	・子供的(での飲味が)ネタが ある ・教育権権の避免	イルドワトロールの規則
		- 主発による間は何を答明した	WELL-SERVICE CREEKS	・自身には温度を研究が行った	· 開発性を発達したまった。ため
プログラト と信仰である	・旅店の名音館でに対面製作され	を大いる を大いる の の の の の の の の の の の の の	NOT OUT THE OWNER OF A PARTY OF THE OWNER OW	WANTED THE PROPERTY OF	TANK ACCOUNTS

フェーズ 2 においては、製作したプロダクトをまちづくりプログラムの中で活用することで、その可能性と課題点を把握した。( その可能性と課題点を把握した。) 今回製作したプロダクト全てについて、利用者やスタッフから、プログラムの雰囲気があり、は多くの声があった。また、ハンモックやそりでは多くの声があった。一方で、 構造的において、組み立ての労力、 構造的問題等プロダクトとしての完成度を製作、活用を繰り返すことで高める必要があることも分かった。

フェーズ 2 におけるプロダクト製作のプロセスによって、間伐材活用プロジェクトに関わる新たな主体を複数発掘することができた。最初の段階から、組織を確立して間伐材活用を進めることには、特に林業関係者をはじめとする木材関連事業者は消極的であり、中心市街地のまちづくりにおいても隣接

地域との連携に消極的な意識があったが、個別のプロジェクトでは、両者とも積極的に協力・参加する意識が伺えた。(図2)これらのことから、個別の具体的プロジェクトによって主体を結びつけ、徐々にネットワーク化していくことが、隣接地域を結びつける手法として有効なのではないかと考えられた。

また、まちづくりの内容や状況に対応した 柔軟なプロダクト開発プロセスの重要性も 示唆された。

まちづくりプログラムの内容に応じて作られたプロダクトは、プログラムと間伐材が結びついた固有のデザイン、利用形態を有しており、これらのプロダクトの完成度を高めると同時に、汎用性を検討することで間伐材の新たな活用の道を開くことができると考えられた。

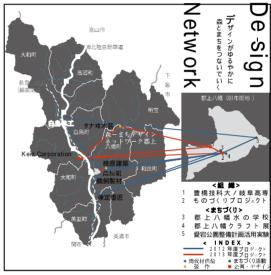


図2 モノづくリネットワークの形成(フェーズ2

(3)フェーズ3:地産材によるモノづくり ネットワークの形成と活動

「森-まちデザインネットワーク郡上」を 核としたネットワーク

フェーズ3では、フェーズ2の実践を踏ま えて、実際のモノづくりを通して、森とまち (隣接する地域間)を結ぶプロダクトデザイ ン・製作の仕組みづくりおよび、中心市街地 でのプロダクト展開の手法の検討を進める こととし、具体的には、地元で活動するデザ イナーKm、郡上モノづくりプロジェクトの 事務局を務める Kn、木工業を営む企業(T 木芸)をコアメンバーに、「森-まちデザイン ネットワーク郡上」(以下、「森-まち」)とし て活動を行った。「森-まち」の活動は、メン バーをコアスタッフのみに限定せず、プロダ クト製作の課題に応じて、様々な立場の人々 に参加してもらい、それぞれの立場からの意 見を吸収しながら進めた。更に、製作過程に 留まらず、まちづくりと連携したココロダナ 活用の展開においても林業関係者などの協 力を得た。(表6)

ココロダナのデザイン・製作過程の特徴

フェーズ3では、デザイン・仕様に関して 精度を高めたモノづくりを行い、販売も視野 に入れたプロダクト製作を目標とした。具体 的には、神棚を現代の生活に即してリプロダ

表6 森ーまちデザインネットワーク郡上の組織構成

	スタッフ	特性
	研究者Ⅰ	八幡町の市民発意の地域づくり活動に関わる。
コアメン	デザイナ ー Km	郡上市を中心にバッケージ、ポスター、H Pなどを手がける。クライアントの思いを引き出すデザイン。 GMP主宰者の一人。
ンバー	GMP 事務局 Kn	岐阜県の地域支援プロジェクトがきっかけ で GMP プロジェクト立ち上げに参加。地域産品のプロモートを主に行う。
	T木芸 T·Y·B	木工関連企業。主に建築関連什器製作の下請けを行う、職人の技術 を活かした自社プロダクト開発に関心を持ち「森ーまち」に参加。
ネット	立光学舎	< 製作過程・まちづくりと連動した展開に参加 > 地域の民俗文化(唄・踊り・風習・民話など)を収集し、伝承するための活動を行う。市井の民俗学者。
<u>5</u> / 2	M 工業 Ka	<製作過程への参加> 金属加工関係の企業。デザイン性を高めた自社製品の開発などに取り組む。GMP主催者の一人
	O 林産 Ko・Mo	<まちづくりと連動した展開に参加> 森林管理・伐採を行う企業。林業の現状に危機感を持ち、木材を直接加工した自社製品(積み木、下駄など)の開発を行う。

GMP: 郡上モノづくりプロジェクトの略。郡上市産品の底上げをテーマに優れた製品を ピックアップし、プロモートを行う民間の取組

クトする「ココロダナ ( CocoroDana )」のデ ザイン・製作を行うこととした。(図3)

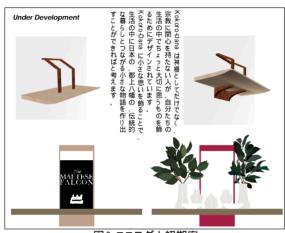


図3 ココロダナ初期案

ココロダナの製作過程における特徴的な 点の一つは、プロトタイプによる検討を重視 した点がある。(写真1)

初期段階から、プロトタイプを作成し、実 物を前に検討を行うことで、ディテイルの仕 様や材質、寸法について、'設計寸法よりも やや太く作った方が存在感を持つことが出 来る。"実際にモノを飾り、壁に設置した時、 どのように見えるのか、などについて、実感 を持って検討を行うことが出来た。また、プ ロトタイプ作成は単に図面からそのまま起 こすのではなく、職人 (T木芸)からの提案 も含めて製作された。このことにより、大工 の経験を持つ職人により建築的技術の導入 やココロダナの梁部に耳をつけた複数バー ジョンの提案など、職人の知識、感性がプロ ダクトに反映された。

今ひとつの製作プロセス上の特徴として、 フェーズ3の最初のミーティングにおける 「単にかっこいいプロダクトを作るだけで はなく、郡上という地域でこれを作る意味を 持たせたい。そのためには、地域と連動した ブロダクトにまつわるイベントを合わせて 作りたい。」(Km)という発言に見られるよ うに、ナラティブ (物語性)なモノづくりプ ロセスも今ひとつの特徴である。先述の職人

の建築経験の反映といった個人的背景のプ ロダクトへの反映もその一つである。また、 デザイン検討の段階で、参加した民俗学の知 識が豊富な立光学舎 I、プロダクトデザイン について経験を持つ M 工業 K は、「当初デザ インの方がスマートだが、梁部の両端に耳を つけた方が地域から生まれたデザインだと いう印象を持つ。」(K)、「地域に伝わる伝承 の多くでは、鬼や龍などの地霊的存在にとっ ては悲劇で終わる。それは日本が統一されて いく過程の中で地域固有の存在が消されて いくということと重なる」「プリミティブな 神というのは全て異なる存在なので祀る形 式も全て異なっているべき」(I) などの発言 を行った。こうした地域に関わる視点を踏ま えた発言は、ココロダナの形態に変化を与え、 物語性を深める手がかりとなった。



写真1 プロトタイプによる検討

## まちづくりとの連動

ココロダナ・プロジェクトを中心市街地ま ちづくりと連携させる試みの一つとして、平 成26年4月13日に行われた郡上市愛宕公 園再オープンの際のオープニングイベント におけるプログラムの一つである「森の美術 館」がある。(表7)このプログラムは、森 と中心市街地の関係づくりを試みる「森-ま ち」のコンセプトを分かりやすく表現するこ とで、ココロダナの物語性を深めることにあ

表7 ココロダナを活用したプログラム「森の美術館 実施日:平成26年4 月13日(日) 場所:愛宕公園(郡上市 連携·協力 愛宕公園再オープン・オープニングイベントの プニングイベントはま プログラムの一つとして、「森ーまち」がココロダナと関連するイベント「森の美術館」を実施 ちづくり協議会が主催、公 園の活用実験段階から本研 究と連携。 内容 O 林産M がココロダナを ·森の美術館の内容は、かつて郡上市の各地で 設置する木の輪切りを製作 行われた子どもたちが山の神を祀る行事である ・ご神体を森―まちのスタ 「山の講」をモチーフにしている。 ・ドングリ、松ぽっくり、木の葉、枝などを利 ッフである職 人Y が製作 K m に声を掛けられた友 人たちが子どもたちのオブ 子どもたちがオブジェを製作し、神木と して選んで、注連縄を飾った公園の木(桜)に 作ったオブジェを吊るす。 ジェづくりのサポート かつて山の講で注連縄づ ご神体として、作ったオブジェを飾ったココロ くりを経験した参加者と ダナをこの木に設置し、設置の際には、奉納儀 Km を中心に注連縄づくり 式として「山の講」の際に唄われた唄をはじめ ・立光学 舎」が奉納の儀式 として、伝承の唄を参加者で唄う

### まちづくりとの関係化

愛宕公園:歴史、生活文化とともに、山と一体化し、森を背後に抱える愛 宕公園で「森の美術館」のイベントを行うことで、山とまちのつながりから 生まれた「ココロダナ」のコンセプトが象徴される

・山の講:山の講をモチーフとするアイデアは、「森ーまち」メンバーの会話で山の講の話題が出たことがきっかけ。K m は今は廃れた山の講を自分が育 った相生地区でもう一度復活させたいと考えており、友人たちに声を掛けて協力を得た。「イベントに客として参加するのも良いが、自分たちで運営す るのは、すご〈面白いやろ?

る。具体的にはオープニングイベントに訪れた子どもたちを主な対象に、子どもたちが木の実や枝などで作ったオブジェを御神木に見立てた公園内の桜の木に飾り、注連縄を巻いて、ココロダナを設置。更には奉納の儀式を行った。また、地域の伝承行事である「山の講」をモチーフとすることで、地域の伝承文化の再生につなげる狙いも持っている。

更にココロダナを市街地における生活場面と結びつける取組として、八幡町中心市街地に立地する地域と密着した店舗などにココロダナを設置し、店に由来するものを飾ってもらうことで、新しい木の文化を作り出そうとする取組も開始した。(写真3)

地域文脈の中で物語を付与されたプロダクトを作り出すことを意図して、ホームページを通じて、取組を公開している。

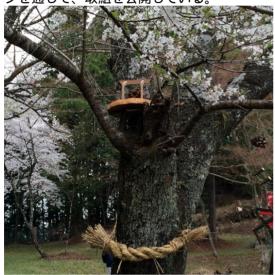


写真 2 森の美術館



写真3 カフェへのココロダナ設置

#### 4.研究成果

本研究の狙いは地産の木材を活用したプロダクト開発と中心市街地のまちづくりの連携を通して、隣接する地域間の関係を構築する手法について、実践的取組を通して基礎的知見を得ることにあった。当初の目標であった中心市街地のまちづくりを地産木材プロダクトのショーケースにすることに関し

ては不十分であるが、まちづくりにおける隣接地域間の関係性構築に向けて、ナラテオ効性が示唆された事は重要である。つまり、プロジェクトの進め方の有効地域の固有性を背景にした物語を生成し、プを担づした物語を生成ということには可じまって、共有するには単にプロジェクトには多様なではでなく、地域に関わる多様ながあるとが大切になる。そのためには単にプロジェクトによっるを地ではなく、コアを中心としたのによってプロジェクとは効果的であると考えられる。

隣接する地域間に生成されたナラティブがいかにプロジェクトの価値を高め、隣接する地域の相補的関係を強めうるかについて、地産木材プロダクトとまちづくりの連携を更に展開させることで明らかにすることが、今後の課題である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

#### [学会発表](計2件)

今田太一郎、今西勇介 柴田良一 田中正史、 -間伐材活用と市街地まちづくりの連携可能 性 隣接地域間の相補的関係性構築に向けた 実践的研究 (1) 日本建築学会

今西勇介 <u>今田太一郎</u> 柴田良一 田中正史、まちづくりプログラムにおける間伐材プロダクトの製作と活用 隣接地域間における相補的関係性の構築 に向けた実践的研究(2)-日本建築学会

[図書](計0件)

## 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)取得状況(計0件)

#### [その他]

ホームページ

http://morimachi.triple-e.jp/ cocorodana

#### 出展

今田太一郎、森-まちデザインネットワーク 郡上 日本木工機械展・ウッドテック 2013 学術研究ブース出展 日本工機械工業会

#### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

今田 太一郎 (IMADA, Taichiro) 研究者番号: 40300579